

前田仁暉¹: 報告—第37回日本植生史学会大会・日本花粉学会第63回大会エクスカージョン
 Hitoki Maeda¹: Report—The excursion of the 37rd Annual Meeting of the Japanese Association of Historical Botany and the 63rd Annual Meeting of the Palynological Society of Japan

2022年10月3日(月)に第37回日本植生史学会大会・日本花粉学会第63回大会のエクスカージョンが日本植生史学会第50回談話会として奈良市の世界遺産である春日山原始林において開催された。講師は前迫ゆり氏(大阪産業大学), 世話人は上中央子氏(奈良文化財研究所), 星野安治氏(同左), 浦蓉子氏(同左), 真邊彩氏(鹿児島県教育庁文化財課), 林竜馬氏(滋賀県立琵琶湖博物館)であった。参加者は25人で, 日本植生史学会と日本花粉学会, および学会を共催した奈良文化財研究所に所属する研究者や大学院生が参加した。

当日は, 午前9時30分に春日大社本殿のバス停付近に集合し, 前迫氏から植生の概要と見学ルートについての説明を受けた。周辺の林内にはもともとイチイガシやコジイなどからなる森林が広がっていたが, 近年はシカ(図1)の被食により, それらの実生は生育しにくい状況にある。その結果, 現在はナギ(図2), ナンキンハゼ, レモンエゴマ, ナチシダなど, シカが忌避する植物が生育する特殊な植生へと交代しつつあるという。

バス停付近から移動し, 前迫氏からナギやナチシダなど春日山原始林の随所に生育する植物のレクチャーを受けつつ「春日奥山遊歩道」へと入った。前迫氏の解説は, 案内ボードを用いてテンポよく進められ, 私のような植物生態学の初心者でも大変理解しやすく興味深いものだった。

遊歩道の入口では, ツクバネガシが倒れたギャップに生育する植物を観察したところ, 在来種のカラスザンショウなどが見られた。カラスザンショウはシカの可食植物であるが, シカが侵入しにくい急峻な谷沿いから発芽したため, 生育することができたという。その周囲にはシカが忌避する代表的な樹種であるシキミやイヌガシが生育していた。

その後, 右手の川向かいにナギの純林と少数のカゴノキからなる御蓋山の植生を眺めながら, 遊歩道を登った。左手の若草山側の林内には, ナギやアセビ, イワヒメワラビなどのシカが忌避する植物に混ざり, イチイガシ等の巨木が点々と生育しており, イチイガシからナギへと移り変わろうとする植生の様子を見学した。

そこから少し登ったところで, 林内に前迫氏が設置した保護柵(防鹿柵)内の植生を見学するため, 特別な許可を得て, 遊歩道をはずれて林内へ直接立ち入った。その際, 参加者は, 林内に種子などを持ち込まないように靴底をクリーニングし, ヒル避けスプレーを足下にふりかけた。林内では参加者が列になって登ることが多いため隊列が長くなり, 前迫氏は全員が解説を聴けるように, 適宜繰り返し, わかりやすく解説されていた。

ナギ林と少数のイチイガシが生育する中, ひとつ目の保護柵は, イチイガシの母樹1, 2本を, シカが侵入できないようにネットで囲ったものであった。ギャップではないため薄暗く, 成長はよくないそうだが, イチイガシ, ムクノキなど, 多様な植物の実生が順調に定着しつつあった(図3)。シカが闊歩する周囲のナギ林との比較が興味深かった。

次に, ツクバネガシが倒れたギャップに設置された保護柵を観察した。柵の中では, パイオニア種のカラスザンショウ, ナンキンハゼのほかにもイヌガシ, シキミ, アサダなどの木本の実生が生育していた。シカの影響を受けずに育った植物の生育状況を観察する貴重な機会となった。

その後, 2013年頃に発生したナラ枯れにより枯死した樹木などを見学しながら, 遊歩道に戻った。遊歩道ではツクバネガシの巨木において, 一部枯れた箇所にはフウランが着生する様子を観察した。さらにナギ林の中にウラジロガ



図1 若草山のシカ。



図2 集合場所付近のナギ。



図 3 保護柵（防鹿柵）内の植生。



図 5 若草山からの眺望。



図 4 若草山山頂での記念写真。

シヤアラカシが点在する林内を横目に見ながら若草山山頂に向けて遊歩道を登った。

12 時過ぎに若草山山頂に到着し、御蓋山を背景に全員の記念写真を撮影した。参加者は遊歩道を懸命に登りきったことへの達成感から、皆とびきりの笑顔で写真撮影に臨んだことが印象的であった（図 4）。なお、記念写真の背景にもなった御蓋山の遠景には、スギやモミの尖った樹形のほかに、やや中途半端に尖ったナギの樹形が確認できた。

下山ルートでは、一年に一度、山焼きを行うことで有名な若草山を下り、芝草地の中にナンキンハゼとイトススキがパッチ状に生育する様子を見学した。当日は見事な秋晴れで、眼下には手前から東大寺大仏殿、平城宮跡、生駒山地などが眺望できた（図 5）。13 時頃、若草山の登山出口にて解散となった。

シカによる被食という特殊な状況で形成されつつある森

の現状と、保護柵内での植物の生育状況の両方を学べた。初心者から専門家まで飽きることのない、とても有意義なエクスカージョンとなった。

最後になったが、終始、パワフルで楽しそうに案内してくださった前迫氏と、このような興味深いエクスカージョンを企画くださった世話人の皆様に深く感謝申し上げる。また、本稿掲載の写真はすべて飯田ゆりあ氏（奈良文化財研究所）の撮影・提供によるものであり、深い感謝の意を示したい。

(〒 630-8577 奈良市二条町 2-9-1 奈良文化財研究所 京都大学大学院人間・環境学研究科連携大学院講座 Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University, Nara National Research Institute for Cultural Properties, 2-9-1, Nijo-cho, Nara, 630-8577)